

論文番号	5 (第10回研究会 2012.11.24 於青山学院大学)
タイトル	コーパスにみる名詞句の文副詞的用法
著者名(所属)	高橋 圭子 (東洋大学 非常勤講師)
連絡先 Eメール	ktakahashi@toyo.jp
<p>論文内容</p> <p>(背景および研究目的)</p> <p>「結果 (その結果)、仮説は証明された」「原則 (原則として)、定員は 20 名だ」「ある意味 (ある意味では)、この現象は興味深い」の下線部のような、名詞句の文副詞的用法が近年増えているようである。しかし、これについての調査・考察は管見ではまだない。本発表では、各種コーパスを用いて名詞句の文副詞的用法の広がりの様相を調査する。そして、歴史語用論の知見を踏まえ、この広がりを持つ意味を考察する。</p> <p>(検討方法等)</p> <p>対象とする名詞句：「実際」「事実」「結果」「基本」「原則」「現状」「正直」「ある意味」 方法：新野 (2011)などを参考に、次の方法で検討する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ●各種国語辞典における、それぞれの名詞の副詞的用法の記述を調査する。 ●「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」「日本語用例検索サイト http://www.let.osaka-u.ac.jp/~tanomura/kwic/aozora/」などを用い、対象とする名詞句の用法の概略を把握し、文副詞的用法について、度数やジャンル別、年代別の分布、文脈的特徴などを調査する。 <p>(結果および考察)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●文副詞的用法の進行・定着の度合いは、名詞句によってさまざまである。「実際」「事実」は、かなり定着している。「正直」「ある意味」は、話し言葉で広がりを見せ、書き言葉にも進出中である。「結果」は、連体修飾句を伴っての副詞的用法は定着しているが、文副詞的用法は途上である。「基本」「現状」「原則」は、カジュアルな話し言葉では出現しているが、まだ定着しているとは言い難い。 ●今回対象とした名詞句の文副詞的用法においては、もとの名詞句の観念的な意味 (ideotional meaning) は希薄化し、前置きの・ヘッジ的に用いられている。つまり、歴史語用論でいう、間主観化・談話化・語用論化の道のりをたどっていると考えられる。 <p>(結論)</p> <p>今回の調査はごく小規模であるが、名詞句の文副詞的用法を歴史語用論の枠組みから説明し得たと考える。今後、さらにさまざまな通時的データを用い、より強固な立証を目指したい。</p>	
<p>参考文献</p> <p>金澤裕之 (2008) 『留学生の日本語は未来の日本語』 ひつじ書房 松田謙次郎編 (2008) 『国会会議録を使った日本語研究』 ひつじ書房 新野直哉 (2011) 『現代日本語における進行中の変化の研究』 ひつじ書房 李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子 (2012) 『日本語教育のためのコーパス調査入門』 くろしお出版 高田博行・椎名美智・小野寺典子編著 (2011) 『歴史語用論入門』 大修館書店</p>	